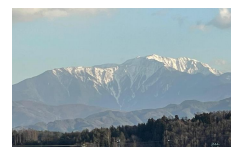


ああ 遠くの空は 晴れている



NO5

南箕輪村教育委員会

広報みなみみのわ 令和8年2月号に掲載されている「あたたかな まなざしで」No2を紹介します。今回の執筆は、南箕輪小学校 松崎校長先生です。

【発行の趣旨】

村報「みなみみのわ」に、子育てに関する情報提供コーナーを設け、子どもにとって大切な学びや経験について考えたり、日頃の子どもとの関わり方を振り返ったりする契機にしたいと思います。小中学生の子育て中の保護者に限らず、これから保育園に入学するお子さんの保護者、子育ては終わったが改めて子育てについて考えていただける世代の方々からお年寄りの方々まで、**村民全体で子育てについて考え合うコーナー**を創っていかれたらと思います。

(次回予定) 令和8年 4月号 南箕輪村教育委員会 加藤相談員が執筆します。

「地域の中で 仲間と共に 自分を磨く」ために、子育てについてみんなで考えていきましょう

あたたかな まなざしで

No.2

「寛容」^{かんよう} 相手を認められる心を：

南箕輪小学校長 松崎 善幸



昨年、戦後八十年という節目から、色々な方のお話を聞く機会に恵まれた。その中で印象に残ったお二人の話を紹介したいと思う。

一人目は、戦場のカメラマンとして知られている渡部陽一さんである。世界各地を飛び回る渡部さんは、戦時下でも希望や願いを持って生活している子どもたちの写真を紹介してくださった。その講演の最後に参加者が、「どうしたら戦争を無くすことができるでしょうか？」という質問を投げかけた。

渡部さんは静かに「寛容です」という言葉を発せられた。宗教の違い、政治の違い、さまざまな立場の違いがあるだろうが、「相手を認める：許す心」が、大切であるということ、を訴えられていた。

二人目は、元駒ヶ根市教育長の高坂保さんである。高坂さんは、九六歳。先の大戦中は十六歳の時に予科練へ志願入隊し、特攻隊員を目指していたそうである。そして戦後、外地に残された日本人を輸送する引き揚げ船の航海士となり、何度も朝鮮や中国と日本を往復したとのこと。そこで出会った人々の、あまりに厳しく切ない

姿や話から、自らの考え方が変わっていったそうである。

高坂さんの「戦争を二度と起こさないためには：」というお話の中で、「一人一人が自分の考えを持つこと。それぞれの意見は違っても、良いが、それを認め合える社会が大切。これは家庭でも地域でも、日本や国際社会でも同じではないか。寛容が大事である」と伝えておられた。

カメラマンとして戦争を間近に見ておられる渡部さん、実際の戦争を体験された高坂さん、年齢も生き方も違うお二人であるが「寛容：相手を認め合うこと」については、同じことを伝えてくださっていた。

昨年、児童が七夕の時に書いてくれた短冊に、「はやくせんそうがおわりますように」という願いが書かれていた。子どもたちにとっても、戦争が身近に感じられる世の中になってきているのだろうか。相手を認めることは苦しいことでもあるが、忘れてはならないことだと思う。



【このコーナーは、偶数月に、教育委員会スタッフと小中学校の担当者が交代で執筆していきます】